

E.H.Eriksonのアイデンティティ理論と教育 (1)

宮 下 一 博

千葉大学・教育学部

E.H.Erikson's identity theory and education (1)

MIYASHITA Kazuhiro

Chiba University, Faculty of Education

本論の目的は、エリクソンのアイデンティティ理論の観点から、筆者が考える現代の学校教育にまつわる諸問題を取り上げ、議論を行うことであった。まず、エリクソンのアイデンティティ理論のポイントを、①ライフサイクルという概念、②心理社会的危機の概念、③相互性の概念、④マイノリティの側から見る、⑤時代・歴史に中を生きる人間、⑥擬似種化と超越的アイデンティティの6つの点から整理し、その概要をまとめた。これらに基づいて、筆者が考える現代の学校教育にまつわる諸問題(①勉強ができない(得意でない)のは問題か、②「みんな(と)仲良くしましょう」はこれでいいか、③子どものいじめは問題か、④子どもは子どもらしく、大人は大人らしく)を提起し、議論を行った。

キーワード：E.H.Erikson (E.H.Erikson) アイデンティティ (identity) 教育 (education)

エリクソン (E.H.Erikson) のアイデンティティ理論に関しては、エリクソンの著書 (Erikson, 1950, 1959, 1964, 1968等) の翻訳の傍ら、それに関する多くの著書や論文が発表されるなど、我が国においても、その解説や研究が一步一步進められてきた。また、日本を含む世界のアイデンティティ研究に関するレビューも行われ (鏞・山本・宮下, 1984; 鏞・宮下・岡本, 1995a; 鏞・宮下・岡本, 1995b; 鏞・宮下・岡本, 1997; 鏞・宮下・岡本, 1998; 鏞・宮下・岡本, 1999; 鏞・岡本・宮下, 2002等)、これらに基づいて、我が国におけるアイデンティティ研究は、非常に成熟した形で発達を遂げてきつつある。その一方で、エリクソンのアイデンティティ理論は、そもそも内容が複雑かつ難解で、その全貌を正確に理解することには困難が伴うことから、これまで、その全貌や本質が理解されないままに、数々の誤解等に基づく研究が一定数行われてきたという現実もある。最近、それらに対する警鐘も込めて筆者らが著書 (鏞・宮下・谷・大倉, 2014) を刊行し、その本質に基づくアイデンティティ研究の必要性について指摘を行うとともに、研究の方向性について具体的な提起を行った。今後、そのようなアイデンティティ研究が数多くなされることを期待しているところである。

本論では、エリクソンのアイデンティティ理論の教育への適用可能性、ならびにそこから見えてくる現代の学校教育の諸問題について議論を行う。そのために、まず、宮下・杉村 (2010)、鏞ら (2014) 等を参考に、エリクソンのアイデンティティ理論のポイントについて、その概要を紹介する。それに続いて、筆者が考える現代の学校教育にまつわる諸問題について議論を行う。

1. エリクソンの理論のポイント

(1) ライフサイクルという概念

ライフサイクル (life-cycle) という用語は、エリクソンの造語である。日本語に翻訳すれば「人生周期」となるが、現代では、カタカナのまま「ライフサイクル」と表記されるようになった。「アイデンティティ」というエリクソン理論における中核概念も、以前は、「同一性」、「主体性」等と翻訳された時期もあったが、その意味する内容が正確に理解されにくいという問題から、現代は、カタカナ表記が一般的となった。他に、「モラトリアム」等の概念等もあるが、要するに、エリクソンの理論の中心となる概念は、その多くが彼の造語であり、極めて日本語訳が難しいという特徴がある。ライフサイクルとは、いわば人間各人の人生の全体であり、具体的には、乳児期から高齢期に至るすべての段階を網羅する概念である。つまり、人間各人は、現在のみならず、過去を生き、未来を生きるという形で、長い人生を生き抜いていくということを強調している。エリクソン以前の発達理論では、その多くが成人期以降を考慮した発達論ではなかったことから、この点の着眼は、非常に画期的なものであった。ただ、エリクソンのいうライフサイクルには、これを超えた内容も付加されている。つまり、ライフサイクルとは、人間各人の人生のすべての段階を意味するのみならず、先祖代々の人生を積み重ねる形で、今後もそれを繰り返していくという、「世代継承」の内容も込められている。人間は誰でも、自分一人だけの人生を生きているのではなく、「世代継承」が意味する、次の世代へとバトンを渡すという役割を持ったかけがえのない人生を生きているということにもなる。また、ここでいうライフサイクルは、一人ひとり異なるもので、各人が、唯一無二の人生、すなわち「1回きりの、その人しか生きることができない人生」を生き抜いていくことが強調されている。現代の教育現場において、「いじめ自殺」が非常に深刻

な問題となっているが、子どもたちに、このようなエリクソンの捉え方を提示していくことは、その予防の意味で、かなり有益ではないかと考えられる。

(2) 心理社会的危機の概念

人間のライフサイクルにおける発達のプロセスを描写するエリクソンの理論では、8つのライフサイクルの段階（乳児期～高齢期）に、次の通り、各々心理社会的危機（psycho-social crisis）が設定されている。乳児期（信頼 対 不信）、幼児前期（自律性 対 恥・疑惑）、幼児後期（自発性 対 罪悪感）、児童期（勤勉性 対 劣等感）、青年期（アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散）、成人前期（親密性 対 孤立）、成人後期（世代性 対 停滞性）、高齢期（統合性 対 絶望）。この心理社会的危機の概念は、一見すると分かりにくそうではあるが、ごく簡略化すれば、すべての段階に、青年期の心理社会的危機である「アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散」を当てはめ、「『アイデンティティ』を、自分は、なかなかいい感じだ、うまくいっている（つまり、今の自分は生き生きしている）」という心理状態、「『アイデンティティ拡散』を、何か変だ、どうもうまくいかない（つまり、今の自分は生き生きしていない）」という心理状態と捉えることができるものである。このように、各々の心理社会的危機は、「陽」と「陰」の概念が「対」で結ばれており、それぞれの段階で、心の中に「陽」が「陰」を少しでも上回る形で内在化することが、人間の健康なパーソナリティの発達を意味すると考えている。このことは、「陽」のみならず、「陰」の内容も、発達にとって重要な意味を有することを指摘するものでもある。これは、人間の心の発達を考える時、完全な発達はないのであって、何らかの不満や不安、葛藤を抱えて進行せざるを得ないと考えるからである。それは、次項で述べる「相互性」の内容とも関わるが、人間は一人だけでは決して健康な形で発達を進めていくことができないということ、つまり（自分ではなかなか思うようにならない）人との関係性の中を生きていく（いかにざるを得ない）ということが関係している。「陰」の内容もそれなりに経験しながら、若干でもそれを上回る形で「陽」の内容を内在化させていくことが、健全なパーソナリティの発達と捉えているわけである。我が国の教育基本法第1条に「人格の完成」という記述があるが、エリクソンの理論を紐解いていくと、一つの観点からとはいえ、まさにこの人格（パーソナリティ）の完成のプロセスを記述しているとみることができる。

(3) 相互性の概念

「相互性（mutuality）」という概念も、エリクソンの理論の中核に位置する概念の一つである。エリクソンの理論は、心理社会的発達理論（psycho-social developmental theory）と呼ばれるように、人間の発達にとって、他者（や社会）との関わりの重要性が強調されている。他者とりわけその人にとって重要な他者との関係においては、様々なところで「give and take」のメカニズムが存在しており、これを「相互性」と名づけた。例えば、親と乳児との関係においては、親は授乳を始めとする育児行

動という形で乳児に「give」を行うが、乳児の方は、ただこれを「take」しているだけかと思いきや、親に自らの反応を示す（例えば、満足して眠るとか、不快に感じて泣く等）という形で、親に「give」をしていると考えている。また、教師と児童・生徒との関係についても、これとまったく同様にその関係性を捉えていくことができる。子どもを成長の軌道に乗せることができることにより、親や教師は、親らしくまた教師らしく成長していくことができると考えたのである。この例では、「教育（世話）」を「与える」側と、「与えられる」側との関係について記述したが、重要な人間関係においては、とりわけ鮮明にこのメカニズムが機能すると考えている。いうまでもなく、子どもは、大人から適切な教育や世話を受け取る（take）ことがいわば仕事であり、大人は、子どもに適切な教育や世話をする（give）ことが仕事となるが、エリクソンは、この「give」と「take」が密接不可分な形で結びついていると考えたのである。

(4) マイノリティの側の視点

エリクソンの理論は、彼の臨床実践や彼の成育史を通じて生まれてきたものである。臨床実践では、主として不適応状態に陥っている人の支援を行うが、そのプロセスにより「元気でなかった人が元気を取り戻していく」という経験を積み重ねていった。その「元気を取り戻していく」というのが、まさに「アイデンティティ」の状態と考えたのである。すなわち、何らかの原因で「元気でなかった人」（心理社会的危機の「陰」の方が上回っていた人）が、他者からの支援により「元気を取り戻していく」（「陽」の方が上回る）ことを目の当たりにする経験の積み重ねが、彼の理論を開花・成熟させたといってもよい。また、エリクソン自身の「養子」という成育史や、ヒトラー（A.Hitler）の台頭により（ユダヤ人であるエリクソンが）母国を追われたという経験等も関係している。つまり、エリクソンの理論は、マジョリティの側からみるよりも、いわばマイノリティの側からみる方がじっくりくると考える方がよい。アイデンティティ研究の中で、数々のマイノリティ・アイデンティティの研究が行われているが、エリクソンの理論の出自を考えれば、これも当然のことと考えることができる。例えば、「性」、「民族」、「宗教」、「障がい」等に纏わるアイデンティティ研究が盛んに行われているが、これらの研究では、一人ひとりが持つ「違い」を「差別や偏見」にしてしまうのではなく、それぞれを「差異」として互いに尊重していく（特にマジョリティの側の）必要性が強調されるのである。これは、現代の教育の「生徒指導」で強調される、「個性の伸長」とも符合する内容といえる。

(5) 時代・歴史の中を生きる人間という視点

エリクソンのいう「心理社会的」という概念の「社会」の中には、「他者」のみならずマクロな「社会」も含まれる。社会は、歴史に伴って変遷し、それぞれが時代として姿を現すが、エリクソンは、人間の発達には、この「時代」や「歴史」との関係性も重要な役割を果たすと考えている。人間にとっては、不可避的に目の前に登場するかのように見える「時代」ではあるが、エリクソン

は、自らが生きる「時代」を選ぶことはできないが、場合によっては「変革」を通して「時代」を変えたり、それを動かすことも可能であると考えた。人間と「時代」との関係についても、いわば「相互性」が機能し得ると考えたわけである。これが、まさに「歴史」を変えるということにも繋がる場合があるが、その一方で、人間各自には、自らの成育史という形でのミクロの「歴史」も存在している。ミクロの「歴史」というのは、まさに本論の冒頭で述べた「ライフサイクル」に他ならないが、各人がミクロの「歴史」を構築しつつ、マクロの「時代」や「歴史」と対峙しながら生きていくということが、人生そのものと考えているのである。このミクロの「歴史」との兼ね合いの中で、「時代」を変革することにより「歴史」を動かすという点について、エリクソンは、ルター (M.Luther) やガンディー (M.Gandhi) の分析を通して、実証的にそのメカニズムについて考察を加えている (Erikson, 1958, 1969)。人間の発達を考える時に、このような視点も非常に重要となると考えているのである。こうした視点を大人 (親や教師等) が示すことにより、子どもたちの自我に刺激を与えることができるとすれば、彼らの能動的で活力のある心性を育てていくことができるわけで、社会が良い方向に発展を続ける大きな要因になると考えられる。

(6) 擬似種化と超越的アイデンティティの概念

擬似種化 (pseudo-specification) とは、『種としての人類』を念頭に置いたもので、『それと似て非なるものと化すこと』(宮下・杉村, 2010) である。具体的に言えば、自民族や自らの国家、宗教等が人類を代表していると考えられる独善性・排他性を意味するが、ごく一般的に表現すれば、人間社会に無数に存在する「差別」や「偏見」の問題である。

人間の心の発達には、他者や社会との関係性はもちろん、「教育」によってもなされる。われわれはすべて、ある限定された環境の中で教育を受ける。例えば、「日本」という国の「〇〇県△△市」であったり、「▽▽家」という家族の中であったりとして、いずれにしても限定された環境の中で人生を進めていく。しかるに、「アイデンティティ」という「生き生きとした心理状態」も、必然的に、その中で、形成されていく。人間の成長とともに、環境の範囲は徐々に広がっていくとはいえず、いわば「井の中の蛙」の状態でのアイデンティティ形成は進行していくし、そうならざるを得ない。そうすると、この人間のアイデンティティ希求のプロセス自体が、「擬似種化」の問題と密接に関わっているという絶望的な結論に帰着するが、エリクソンはこの問題についての気づきを示した上で、人間がそれを克服する「道」を指し示している。それが、「超越的アイデンティティ (antecedent identity)」である。これは、擬似種ではない同じ種としての「人類」という認識をしっかりと持った状態であり、「アイデンティティを超えたアイデンティティ」というべきものである。「人間は、皆違うし、違っていいという認識」であり、自他の尊重を究極的な形で高めた認識といえるものである。もちろん、「超越的アイデンティティ」に至る道は、容易ではないことから、エリクソン自身は「理念」

として語ってはいるが、人間同士の争いや紛争、殺戮等を見るにつけ、人間として考え続け語り続けていかなければならない重要な内容の一つと考えられる。「超越的アイデンティティ」については、エリクソンが考える究極的な発達の状態 (いわば、人格の完成) であることから、当然、子どもの時代にその発達が求められるものではなく、大人に要請されるものである。子ども時代は、アイデンティティを追及する中で、「擬似種化」を推し進めていくというのが、通常の健全な発達のプロセスと違っていいものである。つまり、「擬似種化」のメカニズムが、子ども時代に思いっきり機能しているというのは、それ自体自然なこと当然のことであるが、大人の側が「教育」や「関わり」という形で、それをうまくコントロールできるように支援していくことこそが重要と考えられる。

以上、ごく大まかではあるが、教育への適用可能性という点を絡めつつ、エリクソンの理論のポイントについて整理を行った。

次に、これらに基づいて、筆者が考える現代の学校教育にまつわる諸問題について議論を加えたいと思う。これらの点は、ほぼ思いつくままのアットランダムに近いものであるが、本論は、その第1回目で、今後もこれを数回継続するというので、ご容赦いただければと思う。ライフサイクルでいえば、嘗ては子どもであった親や教師が、大人になった段階で、なぜ子どもの心に寄り添うことが難しくなってしまうのか解き明かしてみたいと思う。エリクソンの理論では、教育を行うという大人の仕事を、何よりも重要なものと考えているからである。

2. 現代の学校教育にまつわる諸問題

(1) 勉強ができない (得意ではない) のは問題か

先述の通り、エリクソンは、人間は皆かけがえのない1回きりの唯一無二の人生を生きていくことを指摘している。その基盤として想定しているのが、「グランド・プラン (grand plan)」であるが、これは、いわば人間各自が有する生得的な資質であり、これがこの社会への誕生後に、周囲の様々な対人関係や社会との関わりの中で徐々に分化・発達していくと考えている。心理社会的危機の発達も、当然、この枠組みに基づいて捉えていくことができる。だとすると、人間は、皆他者とは生得的に異なる素質を持って誕生してくるし、その後を経験する対人関係を始めとする社会との出会いも異なるわけで、似ている人はいるものの、同一の人は決していないという結論に至る。これは、特にエリクソンの理論を引き合いに出さなくとも常識的に考えられる内容ではあるが、こと勉強面に関しては、相変わらずおかしな認識が蔓延しているように思うのは筆者だけであろうか。人間には、数々の特性や特徴がある。各々の個性もある。本来であれば、勉強ができる (得意) というのも、あくまでも一つの特性であって、他の特性 (絵を描くのがうまい、楽器をうまく弾ける、走るのが早い、人に対してやさしい、係の仕事がよくできる、級友から信頼が厚い、等々) と同等に考えていくべきものである。それが、時代が変わり、学歴神話がほぼ崩壊した現代にあっても、保護者、教師とも、いわゆる勉強 (学業面) にとりわけ重点を置

く形が変わらず続いているように感じられる。大学全入の時代に入っても、それなりに厳しい競争があるのも事実である。確かに、勉強ができる（得意である）ことは、学校生活の中では非常に目立つ特性であることは否定できないわけで、それを重視する価値観が継続して存在するというのも、分からないではない。しかしながら、人生100年の現代にあって、人生における学校生活の期間の割合は格段に減少したし、学校生活後により長い時間を過ごす人間のライフサイクル全体を見渡す形での教育の必要性が問われているのではなからうか。現実的には、世の中には、貴賤の別なく、実に多様な職業が存在する。どの職業も社会に必要なだから対等の形で存在するのであって、それぞれの人が、それらの中から自分に適したものを選べるようにする（自らの起業や専業主婦等も含む）ことこそ重要なことではないだろうか。こう考えると、勉強（学業面）をとりわけ重視し、勉強ができる（得意である）か否かという点にそれほど拘泥する必要はないし、大人の側が拘泥しては、子どもの発達の可能性を摘み取ってしまう可能性すらあると考えられる。もちろん、勉強ができる（得意である）というのは素晴らしい特性の一つであるが、それだけを強調されると、生き生きと学校生活を送りにくくなる子どもが多数出てしまう可能性が高い。「生き生きと学校生活が送れない」子どもたちは、様々なやりかたで、彼らの叫びをぶつけてくる可能性があり、軽視できない問題である。

ところで、エリクソンの理論に着眼すると、児童期の心理社会的危機は「勤勉性 対 劣等感」であるが、ここでいう「勤勉性」とは、児童が「自分には何か良いところ、得意なことがある」という認識である。もし、この勤勉性が得られずに、この対をなす「劣等感」にばかりとらわれてしまうと、何らかの不適応行動が生じても不思議ではない。この「勤勉性」という概念は、子どもが、いずれは社会における生産者になるということを想定した上で設定されたものである。この辺りのことは、鑑(2002)等でも論じられている。ということは、「勤勉性」の概念は、「勉強（学業面）」だけに限定されたものではなく、子どもたちが、やがて活躍するであろう社会において発揮し得る可能性がある多種多様な特性であってよいことになる。つまり、大人の側が、勉強（学習面）を含む多種多様な特性の中から、子ども自身が、自分の良いところ、得意なことを見つけられるよう関わることこそが重要と考えられる。

勉強ができない（得意でない）ことは、ある意味でマイナスの特性かもしれないが、だからといって、それだけで、「それでは駄目だ」「君はだめだ」ということには当然ならないはずである。各々の人間の人生は、その人の数だけあるのであって、例えば、子どもの時に「勉強ができなかった（得意でなかった）が、今はばりばり仕事をしていて、とても幸せだ」ということだっていくらでも起こり得る。親や教師が、勉強（学習面）も含む子どもの多種多様な特性に着目し、長い目で子どもの人生に目をやることができるとすれば、子どもは生き生きとした状態で過ごしやすし、それに関わる大人たちは、「give and take」のメカニズムに従って、自らも生き生きと人生を送ることができると考えられる。

(2) 「みんな（と）仲良くしましょう」はこれでいいか

特に、小学校の現場で、この表現はよく使用されている。いわば教師の常套句の一つであり、学校での生活目標等に設定される場合もある。しかし、立ち止まって考えてみると、この表現は非常におかしいことに気づかないだろうか。なぜなら、これを高らかに子どもに訴える教師自身が、これを実践できているのかという問題に突き当たる。職場の教員同士、「みんな仲良く」できているであろうか。友人関係や、近所の人たちとの付き合い、保護者との関係でも、「みんな仲良く」できているのだろうか。常識で考えれば、人間誰しも、好き嫌いがあるし、相性の良し悪し等もあって、みんなと仲良くできるはずがないということは、少なくとも大人は理解しているのではないだろうか。だとすれば、現実を教えない、このような表現は、教育的でないことは一目瞭然である。教師が「みんな（と）仲良くしましょう」という時、そこには使う人によって込められる意味合いは異なる可能性もあるが、教師の側が、すべての子どもがそれぞれの特性や個性を持った存在であるという前提を持っていけば、それに沿った教育の仕方があるのではないかと思う。それに沿ってこの表現を言い換えるとすれば、長文にならざるを得ないが、例えば、次のようになるであろう。「顔形が違うように、みんな違いを持った存在ですから、人の好き嫌いも違います。合う人もいれば、合わない人もいます。それが、現実です。でも、自分が嫌いな人や自分と合わない人であっても、自分と同じように大切な人生を生きています。その人は、自分が嫌いな人、自分と合わない人だけであって、別に合う人がいます。ですから、必ずしもみんなと仲良くする必要はありませんが、自分が嫌いな人や自分と合わない人に対して、例えば暴力を振るったり、こそこそと悪いことをしたりせずに、クラスの仲間として、みんなであうまくやるようにしてください。」確かに、このような複雑な内容を子どもに示すのも大変なことではあるが、いわば現実性のないお題目を唱えるよりも、遥かにいいのではないかと考えている。エリクソンの理論から考えれば、「みんな（と）仲良く」という内容は、超越的アイデンティティの内容そのものと判断される。超越的アイデンティティについては、先述した通り、いわば大人の中の大人を念頭に置いた概念であり、大人であっても多くの人がこの域には到達し得ないと考えられているものであることから、子どもに要求するのは、極めて無理のある内容といわざるを得ない。

このように、この表現の内容を子どもに要請するのはそもそも無理があるが、これに忠実に従おうとする子どもにとっては、嫌いな人や合わない人とも「仲良くしなければならぬ」という思い込みの中で、ストレスや怒りをため込んだり、それをいじめ等の形で表出したりする可能性もあり得る。

現場の先生方には（場合によっては保護者の方々にも）、この点について、じっくりと考えを深めていただければと考えている。

(3) 子どものいじめは問題か

結論をいえば、もちろん問題がないわけではない。いじ

めは、文部科学省(2007)によれば、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」と定義される。他者にこのようなことをするいじめ行為は、卑劣だし、厳罰に値する大問題といえる。しかし、この点に関して、いじめをする子どもだけが問題なのかといえば、エリクソンの理論からすれば、周囲の大人(教師や保護者等)の方が、より問題があるということにならざるを得ない。なぜならば、子どもは、未だ発達途上にいるのであって、その中心となる心理的メカニズムは「take」であるが、十分にこの「take」ができていないからこそ、そのような行為をしてしまうと考えられるからである。この「take」ということを考える時に、真っ先に浮かぶのは、教師や保護者等の大人による「教育」の問題がある。つまり、発達途上の子どもたちは、(もちろん、必ずしもそのすべてではないという限定つきではあるが)経験不足との兼ね合いもあって、未だ自己や他者についての理解が定まっておらず、TPOを考えずに自己の欲求のままに衝動を爆発させたり、理不尽なやり方で他者を攻撃するなどの行動を取る可能性も大いに持ち合わせた存在である。ある意味で、これらを自ら統制できるようになることが、大人への階段を上っていくということに繋がるというよいかもしれない。そのためには、その都度その都度に、教師や保護者等の大人が、彼らを指導したり、支援したりする関わりが不可欠なことを意味する。日常的にコミュニケーションをとりつつ、時に叱ったり、嗜めたりすることが、絶対に必要である。大人の側がこれらを怠ると(つまり、子どもに適切な「give」をしないと)、子どもからすれば、教育という形での「take」ができない状態に陥ってしまうのである。

一般的にいえば、青少年期にある子どもは、思春期的心性や反抗期等の関係で、いじめの問題に限らず大人としては教育や指導がやりにくいという難しさもあるが、実際問題としては、程度の差こそあれ、大人自身も嘗てこのような時期を過ごした経験があるわけで、「自らが子どもであった頃の自分をじっくりと思い出しながらかかわる」という知恵を発揮してほしいものである。教育の現場で、「子ども目線」という点が強調されることもあるが、エリクソンの理論でも、この点は重視されている。ただし、同じような表現を使用するにしても、エリクソンの場合は、その意味内容が若干異なるというよい。エリクソンの場合は、大人が子どもと関わる際の要点をごく簡単に表現すれば、「嘗て子どもであった頃の自分を思い出しながらかかわる」ということになる。どうも大人は、(意識せずにいると)大人になった時点で、子ども時代の自分をきれいに忘れ去り、「大人として子どもの前に立ち現れる」ということをしやすらしい。もちろん、筆者にもその経験は十分過ぎるほどある。エリクソンは、この点を戒め、大人が謙虚な姿勢を持ちつつ、丁寧に子どもの支援や教育に携わり続けることの重要性を説いているのである。

(4) 子どもは子どもらしく、大人は大人らしく

既に述べたように、子どもは「take」のメカニズム、大人は「give」のメカニズムが、それぞれその時期の発

達にとって重要な内容である。つまり、子どもらしい子どもとは、とりわけ「take」を必要としている発達途上の人間、大人らしい大人とは、「take」よりも「give」の方にウェイトが移行した(ある程度)発達した人間を意味する。しかるに、ここでいう「大人」とは、エリクソンの発達段階でいえば、大人としての発達を開始する成人前期(親密性対孤立)よりも、成人後期(世代性対停滞性)をイメージしてもらの方が分かりやすい。成人後期の心理社会的危機である「世代性対停滞性」とは、人生の有限性ということを考える時に、必然的に登場する内容である。「世代性」とは、自分より下の世代との適切な関わりの中で心の中に育まれる内容であり、具体的には、自らの子どもはもちろん、職場での自分より下の世代との適切な関わり、教育現場でいえば、児童・生徒との適切な関わりなどに基づいて徐々に発達がなされるものである。これは、自分より下の世代に対して、今後社会で有益な人間となり、社会の発展を託せるような人間となってもらうために、「give」のメカニズムを十全に発揮できることに他ならない。この関わりを拒否したり、適切な関わりがうまくできないことで生じてくるのが「停滞性」であり、大人は、この状態に陥ると、あたかも自分の人生が失敗であったかのような計り知れない苦しみや後悔等の否定的な感情を味わうと考えられている。大人は、この「世代性」と「停滞性」の双方を経験せざるを得ないが、前者が後者を相対的に上回って心の中に根づいていくことが、この時期の「生き生きとした心理状態」に繋がる。大人の心理をうまくいい表わしたエリクソンの言葉—大人は、必要とされることを必要とする—がある。じっくり噛みしめたいものである。

一方、子どもは「take」を必要とする存在であり、それは同輩との関係でも同様であるとはいえ、「give」をうまく操れる存在である「大人」との相互関係の中で、極めて自然な形で「give and take」の相互性が機能しやすい。これを有効活用しない手はない。大人からすれば、手を焼かせる子ども、面倒な子ども等に見えるかもしれないが、それこそが「支援」や「教育」を必要としている「子どもらしい子ども」の姿なのである。このような時に、「大人らしい大人」の役割を果たすことにより、互いが成長への軌道に乗ることができるわけで、大人の側が手を抜かず子どもと関わろうとする姿勢こそが、重要になると考えられる。

引用文献

- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York: Norton.
 Erikson, E. H. 1958 *Young man Luther*. New York: Norton.
 Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press.
 Erikson, E. H. 1964 *Insight and responsibility*. New York: Norton.
 Erikson, E. H. 1968 *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton.

- Erikson, E. H. 1969 *Gandhi's truth*. New York: Norton.
- 宮下一博・杉村和美 2010 大学生の自己分析：いまだ見えぬアイデンティティに突然気づくために ナカニシヤ出版
- 文部科学省 2007 「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の見直しについて
- 鎌幹八郎 2002 鎌幹八郎著作集 I ナカニシヤ出版
- 鎌幹八郎（監修）・宮下一博・谷冬彦・大倉得史（編）2014 アイデンティティ研究ハンドブック ナカニシヤ出版
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子（共編）1995a アイデンティティ研究の展望Ⅱ ナカニシヤ出版
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子（共編）1995b アイデンティティ研究の展望Ⅲ ナカニシヤ出版
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子（共編）1997 アイデンティティ研究の展望Ⅳ ナカニシヤ出版
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子（共編）1998 アイデンティティ研究の展望Ⅴ-1 ナカニシヤ出版
- 鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子（共編）1999 アイデンティティ研究の展望Ⅴ-2 ナカニシヤ出版
- 鎌幹八郎・岡本祐子・宮下一博（共編）2002 アイデンティティ研究の展望Ⅵ ナカニシヤ出版
- 鎌幹八郎・山本力・宮下一博（共編）1984 アイデンティティ研究の展望Ⅰ ナカニシヤ出版